２００７年３月豪州ミナミマグロ蓄養実態視察（ポートリンカーン現地視察）報告

我が国は、ＣＣＳＢＴ１３において合意した豪州ミナミマグロ（SBT）蓄養事業調査計画が一向に進行しないことを憂慮し、本年３月ポートリンカーンを訪問し視察活動を行った。本報告書は、現地視察５日間の内容を報告するものである。

１．要約

視察期間は２００７年３月１９日～２３日であった。日本側代表団員は別添１の通りである。今回の視察で実施した内容は、①ポートリンカーンからの航空目視、②曳航生け簀から蓄養生け簀への活け込みの観察、③ＤＡＦＦ及びＡＦＭＡに対する質問、④現地業界への質問である。

２．結果

①航空目視

ポートリンカーンから出発した飛行機に機上しての航空目視により、豪州蓄養事業の規模を把握した。現在、撮影した映像及び写真を解析中であるが、暫定値としても１８０～２００程度の蓄養生け簀を現認した。現地でＡＦＭＡ代行民間業者（プロテック・マリーン）担当官からは、蓄養生け簀は１４０基しかないとの説明を受けたが大きな数値の開きがある。

②蓄養生け簀への活け込み

11000 尾の SBT を収容し２週間曳航した曳航生け簀から蓄養生け簀へ 2800 尾活け込む現場を観察した。蓄養生け簀表面には、巻き網での漁獲及び曳航中に傷ついたと思われる SBT が数多く見られ、観察中に実際に死亡するＳＢＴも確認された（死亡したＳＢＴを映像に納めた）。これ以外にも数時間後又は数日後に確実に死亡するであろうと思われる異常行動を行う SBT を数多く現認した。

蓄養生け簀への活け込みに関し、プロテック・マリーンは尾数カウントのためのセットアップに非常に時間を費やし（作業を途中で中断した）、かつ、カウントは１台のビデオカメラの映像を使い、人が尾数を数えるという物であった。

プロテック・マリーン担当官の説明では曳航された SBT の平均体重は４０尾サンプリングの結果、１７．１ kg とのことであった（日本側代表団は当該４０尾サンプリングを観察していない）。我が方調査団の科学者（我が国クロマグロ養殖の第一人者）は、当該曳航生け簀から蓄養生け簀への活け込みを目視にて観察した結果、平均体重は確実に２０ｋｇを超えているとの見解を得た（３５～４０ｋｇの SBT も散見）。

また、視察期間中、毎日、蓄養生け簀まで給餌に行く給餌船の出入港を観察し、中にはかなり大型の SBT（蓄養期間中に死亡したものと考えられる）を２０尾程度を水揚げする船も現認した。

③４０尾サンプリング

今回の訪問では、４０尾サンプリングを観察する機会は無かった。このため、豪州側

に対して、４０尾サンプリングを実施しているところをビデオ撮影し、日本側へ提供して欲しい旨依頼した。

④ＤＡＦＦ及びＡＦＭＡに対する質問

現地でいくつかの質問をサイモン・ビーチ氏（ＤＡＦＦ）及び Malcolm　Southwell 氏（ＡＦＭＡ）に対して行ったが、明確な回答を得られていないものがあった。明確な回答が得られていない質問は、別添２のとおり。

⑤現地業界関係者へのインタビュー

現地業界関係者及び科学者に対し、主に蓄養生け簀の数及び蓄養期間中の成長率についてインタビューを行った。

Ａ社からは、ポートリンカーン蓄養業者１１社が所有する蓄生け簀の数の各社別の情報を得ることができた。現地科学者 David　Ellis 氏は、平均成長率が２倍と言うことなので、２倍を超える個体も相当数存在するとの説明を行ったが、現地業者（３名）からは明確に成長率は１．５～１．７倍との説明を受けた。豪州政府がＣＣＳＢＴに報告している成長率（約２倍）と現地業者との説明には大きな差が認められた。

３．結論

今回の視察では、豪州蓄養事業に関し多くの不明点がある中、まず以下の３点を可及的速やか明らかにする必要があるとの結論に達した。なお、今回の視察で取得した映像及び写真については CCSBT メンバーに回章する用意がある。

（１）漁獲時及、曳航中及び蓄養中の死亡率

現地業者より、漁獲時、曳航中、活け込み直後はかなりの死亡が発生するとの説明があり、日本側調査団も相当弱った SBT を多数目撃した。先ず、豪州は、漁獲時、曳航期間中及び蓄養期間中の各段階において死亡したミナミマグロのデータ（死亡尾数、死亡日、死亡した SBT の体重・体長情報）を CCSBT に提出すべきである。なお、ＡＦＭＡ担当官からは、これら死亡尾数を把握しているとの説明を受けている。

（２）４０尾サンプリング

今回観察した曳航生け簀には、かなり大型のミナミマグロが存在していることが現認され、我が方調査団の科学者が目視により推定した平均体重（２０ kg 以上）と、４０尾サンプリングに基づく平均体重（１７．１ kg）には乖離があった。従来から問題があると指摘されている４０尾サンプリングについて、先ず、全 CCSBT メンバー及びＳＣ外部科学者に対してその手法を早急に公開し、観察する機会を提供すべきである。

（３）蓄養期間中の成長率

豪州政府は蓄養期間中の成長率は平均約２倍であると CCSBT に対して報告している。豪州政府の報告が正しく、平均成長率が２倍であれば、最高水温が２０度前後のポートリンカーンで、３～６ヶ月の蓄養期間中に２倍を超える成長率を示すミナミマグロが多数存在することになる。他方、今回、日本側代表団が接触した現地業者は、成長率は１．５～１．７倍と述べていた。蓄養期間中の成長率については、疑義が多

いことから、早急に実証実験により成長率を検証するべきである。

なお、最近は、脂肪含有量が少ない地元のイワシもかなり与えられているとの情報を得ている。成長率を検証するため、給餌内容も含めたデータを CCSBT メンバーに対して公開すべきである。

４．謝辞

今回の調査団訪問に際し、豪州側による航空目視調査などをアレンジに感謝する。

別添１

現地調査団

成澤行人　水産庁遠洋課かつお・まぐろ漁業企画官

塩澤聡　　水産総合研究センター奄美栽培センター場長

羽根田薫　羽根田水産

籠尾啓太（株）太和

三浦望　　日本かつお・まぐろ漁業協同組合国際部課長

本山雅通　全国遠洋かつお・まぐろ漁業者協会アドバイザー

小池くみ　通訳

別添２

２００７年３月ポートリンカーン現地視察再質問事項

２００７年３月２１日ＤＡＦＦ及びＭＡＦＦに対しいくつかの質問をしたが、明確な回答を得られなかったものに関し以下再質問する。

１．蓄養事業規模に関するもの

南オーストラリア州が管理しているポートリンカーン蓄養事業に関し、生け簀の数、その設置場所示した海図を提出していただきたい。また、生け簀設定に係わる許可内容、給餌船数、給餌船への許可内容、１隻の給餌船がカバーできる生け簀の数はどうなっているのか？

２．死亡率、死亡した SBT の流通

ＭＡＦＦは蓄養事業における死亡率について管理しているとのことであるが、2000 年から漁獲時、曳航中、蓄養中の各死亡率を提出されたい。また、豪州政府よりサマリーとして提出された 2005－2006 年漁期における死亡率３．５８％とはどの段階の死亡率なのか？現地で多くの死亡魚の水揚げを目撃したが、このような魚が地元レストランに供されるのか？死亡魚の扱い、国内流通についてデータを提出されたい。

３．蓄養 SBT の残留物質について

ＤＡＦＦ担当から豪州は輸出農水産品には生産の段階から責任を持って品質管理を行っており、輸出 SBT に残留するダイオキシン、ＰＣＢに関するデータは現場ですぐ提出するとのことであったがもらっていない。直近のデータを提出していただきたい。

以上